

アタッチメント（愛着）理論から アプローチする心理臨床

——事例検討および支援のあり方に関する試論的考察——

Attachment-based approach to psychological clinic :
A tentative course of counseling and
clinical support based on attachment theory.

初 塚 眞喜子

はじめに

近年、発達やパーソナリティ、対人関係等の研究領域において、アタッチメント（愛着）理論に対する関心が高まっている。アタッチメント理論の視点から人間の心と行動にアプローチするという研究手法は、1つのトレンドを形成していると言ってよいであろう。

このような傾向は心理臨床領域にも着実に波及してきており、特に子ども虐待や発達障害といった問題との関係で、アタッチメント理論の臨床領域への適用・応用に注目が集まりつつある。

もともと、わが国におけるアタッチメント理論の心理臨床領域への適用・応用に関する研究の歴史は浅く、数井・遠藤（2007）によってようやく先鞭が付けられたという段階にあり、心理臨床の現場における事例検討や支援の指針をアタッチメント理論の立場から提示するという研究は、現時点では少数にとどまっている。

そこで、本稿では、アタッチメント理論の知見からどのような事例検討や支援の指針を引き出すことができるのかを—いまだ試論の域を出るものではないが—考察することにした。

I. アタッチメント理論

1. アタッチメントとは何か？

アタッチメント (attachment) という語は、一般には、人が特定の他者との間に築く緊密な「情緒的絆 (emotional bond)」を意味するものとして用いられることが多い。もっとも、アタッチメント理論の提唱者であるボウルビー (Bowlby, J.) は、その概念を、より限定的に理解し、「生物個体が危機的状況に接し (あるいは危機的状況を予知し)、不安や恐れといったネガティブな情動が強く喚起されたときに、特定の他個体への近接 (くっつき) を通して、主観的な安全の感覚 (felt security) を回復・維持しようとする行動傾向」と定義していた (数井・遠藤, 2005; 遠藤, 2009 a)。

最近、わが国の心理学領域では、アタッチメントを、上のようなボウルビーが提示した原義に忠実に理解しようとする立場が支配的となっている。そうした支配的見解においては、①ボウルビーの提唱したアタッチメントという概念の本質が、「ネガティブな情動状態の制御・調節」-つまり、危機的状況で一時的に喚起された不安・恐れというネガティブな情動を低減・解消し、平常有しているべき安全・安心感を回復すること-に求められるという点と、②アタッチメントには、本来、愛情や親近感といったポジティブな要素は含まれないという点が強調されており、その影響から、最近の心理学領域では、「『情緒的絆』から『生物個体の傾性』へ」という、アタッチメントの意味のとらえ直しが進んでいる。

2. 人の発達におけるアタッチメントの機能

(1) 心身の発達全般におけるアタッチメントの機能

人の心身の発達全般におけるアタッチメントの機能は、次のように説明できる。子どもの健全な発達にとって、探索や学習、遊びといった活動は不可欠であるが、不安や恐れといったネガティブな情動状態に陥ると、子どもは他のことに注意を向けることができなくなり、探索・学習・遊びと

いった活動に支障を来たすことになる。ヒトの遺伝子には、生き残りの確率を高めるために、危機的状況になると他の感情や行動に優先して不安・恐れを喚起させるという行動傾向（行動システム）が組み込まれており、子どもが危機的状況に直面すると、探索・学習・遊びの好奇心・達成動機等よりも、危機的状況での不安・恐れが優先して喚起されるからである。そのため、子どもが、心身の発達全般にとって不可欠である探索や学習、遊びといった活動に集中するためには、危機的状況で喚起された不安・恐れといったネガティブな情動を、養育者への近接（アタッチメント）によって低減・解消しなければならないというわけである（数井，2007）。

ボウルビーが、アタッチメントの本質を、不安・恐れといったネガティブな情動の制御・調節という点に求めたことは前述したとおりであるが、その背景には、不安・恐れという情動が心身の発達、そして適応的な行動全般を阻害する要因であるとの想定があったものと考えられる。

② 社会性の発達におけるアタッチメントの機能

人の心身の発達全般におけるアタッチメントの機能は以上のようにまとめられるが、心理学領域で行われてきたアタッチメント研究においては、特に、アタッチメントが人の社会性の発達プロセスにおいて果たす機能が重視されてきた。ここにいう「社会性」とは、「円滑な対人関係を構築し、適応的な社会生活を営む上で必要となる能力、知識、スキル、感情傾向等の総体」（遠藤，2009 b）のことを指して用いられる概念であり、対人関係やパーソナリティといった概念と重なり合うものである。以下では、ボウルビーの仮説に依拠して、人の社会性の発達プロセスにおけるアタッチメントの機能につき、①子どもの自立との関係、そして、②子どもの成長後の対人関係スタイルとの関係、以上2つの観点から見ていきたい。

①アタッチメントと子どもの自立：物理的安全基地から心理的安全基地へ

養育者からの自立（子どもが養育者から離れて外界で主体的・積極的に探索活動・学習活動を行うようになること）は、適応的な社会生活を営んでいく上で不可欠となる条件であるが、アタッチメント理論によると、子どもが養育者から健全な形で自立できるかどうかは、乳幼児期にお

ける養育者とのアタッチメント関係のあり方に影響されると言われている。その影響は、具体的には、以下のように説明することができる。

出生直後の子どもが独力で移動することは不可能であるが、生後 10 ヶ月前後になると、「はいはい」などによって独力で移動することが可能となる。その段階になると、子どもは、探索行動（養育者から離れて行う外界の探索・学習活動）をとるようになるが、その過程で危機的状況に直面し、一時的に不安・恐れというネガティブな情動が強く喚起された場合には、遺伝子に組み込まれたアタッチメントという行動傾向が自動的・無意識的に働き、養育者への近接（くっつき）を確保するためのアタッチメント行動をとる。そして、養育者による保護を受けることによって不安・恐れが解消され、安全・安心感を得ると、子どもは養育者から離れて外界の探索行動を再開する。この場合、子どもは、養育者を「安全基地（secure base）」（自分にとって安全や安心感を得られる活動の拠点）として利用していることになる（最近では、「探索行動→危機的状況での不安・恐れ→アタッチメント行動→養育者の保護→安心・安全感→探索行動の再開」という一連のサイクルを、「安全の環（circle of security）」を呼ぶことがある）。

このような形で、養育者を「安全基地」として利用する体験を積み重ねていくことで、「自分は養育者から受け容れられる存在である、養育者はいざというときは安全基地としての自分を保護してくれる」というイメージ（自己と養育者に対する肯定的イメージ）が、徐々に、子どもの認知機構の中に内在化されていく（心理的安全基地＝内的作業モデル〔internal working model〕の形成）。そして、そのイメージの内在化（内的作業モデルの形成）が進行するにつれて、子どもは、危機的状況に直面して不安や恐れを感じたとしても、実際に母親と物理的に近接してその保護を受けなくとも、内在化されたイメージとしての「安全基地」にアクセスするだけで、不安や恐れを解消し、安全・安心の感覚を得られるようになっていく。つまり、子どもは、「安全基地」である養育者との物理的近接を経ることなく、その「安全基地」である養育者を（無意識的に）イメージするだけで、不安・恐れを解消し、安心・安全感を得ることができるようにな

っていくわけである（このように、アタッチメントの内容が「物理的安全基地」への近接から「心理的安全基地」への近接に移行していくことを「アタッチメントの発達」と呼ぶことがある）。このことにより、子どもは、養育者と分離された状況においても、主体的・積極的に、探索・学習・遊びといった活動を行えるようになる（養育者からの自立）。

反対に、養育者を「安全基地」として利用する体験を積み重ねることができなかった場合（つまり、危機的状況で養育者への近接、養育者による保護の機会を充分には与えられず、不安や恐れを解消できないという体験を積み重ねた場合）には、「自分は養育者に受け容れられない存在である、養育者は自分を保護してくれる存在ではない」というイメージ（自己と養育者に対する否定的イメージ）が、子供の認知機構の中に内在化され、その結果、外界で主体的・積極的に活動することが困難になるとされる。

要するに、アタッチメント理論の立場からすると、子どもの養育者からの自立のプロセスは、子どもが危機で感じたネガティブな情動を自分ひとりで調整し、安全・安心感を得られるようになっていくプロセス（「心理的安全基地」の形成プロセス）であるということになり、この意味での自立を促すためには、養育者を「物理的安全基地」として利用する体験を充分に積み重ねることが不可欠となる。なお、ボウルビーは、上記のプロセスを、アタッチメント行動の特徴から4段階に分類整理しているが、それについては、数井（2005 a）や遠藤（2005）の解説を参照されたい。

②アタッチメントと子どもの成長後の対人関係スタイル

子どもは、3～6歳頃になると、養育者とのアタッチメント関係によって内在化された自己と養育者に対する肯定的／否定的イメージ（内的作業モデル）を、母親以外の者との関係でも無意識的に適用するようになるとされる。つまり、子どもの中に内在化された自己と養育者とのアタッチメント関係のイメージが、自己と他者の関係性のモデルとして一般化されるのである。具体的には、乳幼児期の養育者とのアタッチメント関係によって、子どもの中に、自己と養育者に対する肯定的イメージ（作業モデル）が内在化された場合には、成長後、無意識のうちに自己と他者一般に対す

る肯定的イメージ（「自分は他者から受け容れられる存在である／他者は信頼できる存在である」というイメージ＝後述のポジティブ型内的作業モデル）をもって他者の行動を予測・解釈するようになるため、良好な対人関係を円滑に構築することが可能になるとされる。

反対に、乳幼児期のアタッチメント関係によって、自己と養育者に対する否定的イメージが内在化された場合には、成長後、無意識のうちに自己と他者に対する否定的イメージ（「自分は他者から受け容れられない存在である／他者は信頼できない存在である」というイメージ＝後述のネガティブ型内的作業モデル）をもって他者の行動を予測・解釈するようになり、他者との間での良好な関係性の構築が困難となるという。

そして、後述のように、乳幼児期のアタッチメント関係によって内在化される自己と他者一般に対するイメージ（内的作業モデル）は、新たな満足できる人間関係（緊密な友人関係や恋愛関係、夫婦関係等）の構築・維持を経験し、そうした関係性の中で新たなアタッチメント対象（心理的安全基地）を得ることで変化しようと考えられているが、一般には、相当程度の継続性・安定性を有しており、子どもの対人関係スタイルを生涯にわたって持続させる機能を果たすものと考えられている（遠藤，2007）。

以上のように、乳幼児期における養育者とのアタッチメント関係は、子どもの成長後の対人関係スタイルの規定要因になるという形で、子どもに生涯にわたって影響を及ぼしつづけることになるとされている。養育者を「物理的安全基地」として利用する体験を積み重ねることによって、自分への自信と他者への信頼がイメージとして内在化され、成長後は、そのイメージを基盤として他者との関係性を構築していくのである。

（3）一般的発達プロセスの仮説の提示から、個人差の実証的解明へ

アタッチメント研究は、その当初の段階では、上述のような、アタッチメントが人の社会性の発達（自立、将来の対人関係スタイル）に与える影響の一般的プロセスを理論的に説明することを主要課題として行われたが、その課題に一応の目処がつくと、アタッチメント研究の主要な関心は、アタッチメントの個人差（養育者をどのような形で、どの程度「安全基地」として利用しているのかについての個人差）とそれを生み出す要因

を実証的に解き明かすという方向へと展開していった。以下、項を改めて、アタッチメントの個人差とその要因に関する研究について見ていく。

3. アタッチメントの個人差とその類型化

(1) 乳幼児のアタッチメント・スタイルと養育の質—SSPによる測定

エインズワースらは、ストレンジ・シチュエーション法 (Strange Situation Procedure: SSP) により、子どもがどのような方略で「安全基地」である養育者への近接を確保しているのか—つまり、養育者を「安全基地」としてどのような形で、どの程度有効に利用しているのか—には個人差があり、その個人差の決定要因は養育者の養育の質に求められることを報告した (Ainsworth et al., 1978)。

SSP は、行動観察による乳幼児のアタッチメント・スタイルの測定手続であり、その方法は、大まかに言うと、子どもを (彼らにとっては) 新奇な実験室に導き入れ、見知らぬ人物に対面させたり、養育者と分離させたりすることにより、子どもにマイルドなストレスを与えることでその不安を喚起し、子どもが養育者に対してどのようなアタッチメント行動を示すか—つまり、子どもが養育者をどのような形で、どの程度有効に「安全基地」として利用しているのか—を、特に養育者との分離場面と再会場面に着目して観察するというものである。

SSP によるアタッチメント・スタイルのタイプ分類と、そのスタイルの分化の決定要因である養育者の関わり方は、以下のように整理される。

①安定型 まず、養育者の養育態度が「敏感性 (sensitivity)」 (= 子どもの心身の状態を敏感に察知し、子どものニーズに対して適切に応じ得る特性) と「一貫性 (consistency)」 (= 平常、同じような態度・姿勢で安定的に子どもに関わることができる特性) の双方を兼ね備えたものである場合には、子どものアタッチメント・スタイルは、自己と養育者に対する肯定的イメージ (ポジティブ型の内的作業モデル) を内在化していくため、危機的状況に直面すると養育者に対して不安・恐れといったネガティブな情動状態を率直に訴え、養育者の保護を受けると安全・安心感を充分に得て、再び活発な探索行動へと戻るといふ、安定したものとなる (安定

型=Bタイプ)。このタイプの子どもは、SSPの分離時には多少混乱するが、再会時には歓迎して積極的に身体接触を求めていくというアタッチメント行動を示す。このタイプの子どもの養育者は、「安全基地」としての役割を適切に果たしているということになる。

安定型の場合とは異なり、養育者の養育態度が「感性」または「一貫性」のいずれかを欠くものである場合には、自己と養育者に対する否定的イメージ（ネガティブ型の内的作業モデル）を内在化していくため、子どものアタッチメント・スタイルは不安定なものとなる（不安定型）。この不安定型は、養育者の「安全基地」としての役割が限定的にしか機能していないタイプである。不安定型は、さらに、回避型とアンビバレント型の2つのタイプに分類される。

②回避型　まず、養育者の養育態度に「感性」が欠けている場合（典型的には、拒否的あるいは無関心な態度で関わり、子どもが保護を求めて送ってくるサインを適切に受けとめることが少ない場合）、子どもは、「自分は拒絶される存在である」、「自分が近づこうとすればするほど養育者は離れていく」という内容のイメージ（内的作業モデル）を内在化し、結果的に養育者との最低限の近接関係および安全の感覚を得るために、あえてアタッチメント行動を最小限に抑え込み、養育者に対して回避的な振る舞いを見せるようになる（回避型=Aタイプ）。これは、子どもに対して拒否的な養育者のもとでは、保護してほしいという信号をあまり送らないことこそが、養育者との近接関係の維持に効率的に働くという、逆説的な状況といえる（数井，2005 a）。このタイプの子どもは、SSPの分離時にはそれほど混乱を示さず、常時、相対的に養育者との間に距離を置き、再会時には、養育者を歓迎する行動をとらず、養育者から離れて遊んでいたりする傾向があると言われている。

③アンビバレント型　他方、養育者の養育態度に「一貫性」が欠けている場合（あるときは感性をもって関わっているが、あるのときは拒否的・無関心な関わり方をしているという特性が認められる場合）には、子どもは、「自分はいつ見捨てられるかわからない」、「養育者はいつ自分の前からいなくなるかわからない」といった内容のイメージ（内的作業モデル）

ル)を内在化しやすくなる。その結果、養育者の所在やその動きにいつも過剰なまでに用心深くなり、養育者の関心を絶えず自分の方に引きつけておくために、養育者に対し、できる限り自分の方から最大限に不安・恐れといったネガティブな情動状態を訴え、最大限のアタッチメント行動を示すようになる。もともと、上記のようなイメージを内在化していることから、養育者がアタッチメント行動を受けとめて保護したとしても、安全・安心感を十分に得ることはできない。このように、養育者の養育態度に「一貫性」が欠ける場合には、子どもは、養育者に対して最大限のアタッチメント行動を示すものの、養育者の保護を受けても安全・安心感を十分に得られないという、葛藤的なアタッチメント・スタイルとなる(アンビバレント型=Cタイプ)。養育者がいつ対応してくれるか分からないという予測可能性の低さのゆえに、保護を求めて強いサインを送り続けるという点が、このタイプの子どもの示すアタッチメント行動の特徴であると言える(数井, 2005 a)。このタイプの子どもは、SSPの分離時には激しい苦痛を示す。再会時には、身体接触を求めながら、自分から離れたことに対して養育者に激しい怒りをぶつけたり抵抗の構えを見せたりするという、両価的(アンビバレント)な行動を示す。

④無秩序・無方向型 従来、乳幼児のアタッチメント・スタイルは、上の3つのタイプのいずれかに振り分けられることが一般的であった。しかし、1990年代に入り、抑うつ傾向が高かったり精神的に極度に不安定な養育者に養育されている乳幼児、また、養育者による虐待や極端なネグレクトを経験している乳幼児は、上の3つのタイプのいずれにも当てはまらない、特異なアタッチメント行動をとることが明らかにされるに至った。すなわち、遠藤(2007)の概説によると、被虐待児等は、その不安が喚起された場面(SSPの分離・再会場面等)において、養育者への「近接」と「回避」という本来ならば両立しない行動を同時に(例えば顔をそむけながら養育者に近づこうとする)もしくは継続的に(例えば養育者にしがみ付いたかと思うとすぐに床に倒れこんだりする)見せる、というのである。また、不安喚起場面において、養育者を前にして、不自然でぎこちない動きを示す、タイミングのずれた場違いな行動や表情を見せ

る、突然すくんでしまう、うつろな表情を浮かべつつじっと固まって動かなくなるといった行動も見られ、総じて、どこへ行きたいのか、何をしたいのかが読み取りづらいという。さらに、時折、養育者の存在におびえるような素振りを見せることがあり、むしろ初めて出会う人物（SSPの実験者等）に対し、より親しげな態度をとるようなことも少なくないという。こうした行動パターンは、「安全基地としての養育者への近接」という本来のアタッチメント行動の目的に適合しないという意味で、組織化されておらず（disorganized）、明確な方向性を持たない（disoriented）アタッチメント・スタイルということになる（未組織型＝無秩序・無方向型＝Dタイプ）。この点で、「安全基地としての養育者への近接」という目的に適合した（つまり、目的のもとに組織化された）アタッチメント行動のパターンであり、養育者が「安全基地」としての機能を－たとえ限定的にはあるにせよ－果たしているという意味で個人差の範囲内にあるといわれる他の3つのタイプ（＝安定型・回避型・アンビバレント型＝「組織化されたアタッチメント」）とは明確に区別される。

被虐待児等が上のようなアタッチメント行動のパターンを示すようになる理由は、次のように説明される。すなわち、何か危機が生じたときに本来逃げ込むべき「安全基地」であるはずの養育者自身が、子どもに危機や恐怖を与える張本人でもあるという極めて逆説的な状況（「避難すべき唯一の場所が恐怖の源でもある」という状況）において、子どもは、不安や恐れを感じたとしても、養育者に近づくことも、また養育者から遠退くこともできず、さらには自らネガティブな情動を制御する有効な対処方略を学習することもできないため、結果的に、本来両立しない近接と回避という行動を同時にとったり、うつろにその場をやり過ぎたり、また凍り固まった状態に陥るしかないのだという（遠藤，2007）。

近年では、この無秩序・無方向型に分類される子どもに、様々な認知・行動上の問題や精神病理が生じるものと想定されるようになり、問題行動や精神病理の発生という観点からして本質的に重要なのは、アタッチメント・スタイルが安定型であるか不安定型（回避型・アンビバレント型）であるかという点ではなく、むしろ組織化されているか否かという点である

表1 SSPによる乳幼児のアタッチメント・スタイルのタイプ分け

タイプ	ストレンジ・シチュエーション (分離・再会等の新奇場面) で示す行動	養育者の関わり方	アタッチメント・スタイル (アタッチメント行動の特徴)	
組織化型	B安定型	分離時には多少混乱するが、再会時には歓迎して積極的に身体接触を求めていく。	敏感性・一貫性ともに高い。 安全基地の役割を適切に果たしている。	危機的状况に陥ると、養育者に対し、不安・恐れといったネガティブな情動状態を率直に表明し、積極的に保護を求めていく。
	A回避型	養育者との分離に際し、さほどの混乱を示さず、常時、相対的に養育者との間に距離を置いている。再会に際しても、養育者を歓迎する行動をとらず、養育者から離れて遊んでいたりする。	敏感性が低い(拒絶的もしくは無関心な関わり方)。 安全基地の機能は限定的。	養育者との最低限の近接関係および安全の感覚を得るために、あえて「くっつきたい」とシグナルを最小限に抑え込み、回避的な振る舞う。
	Cアンビバレント型	分離に際して、激しい苦痛を示す。再会時には、身体接触を求めながら、自分から離れたことに対して養育者に激しい怒りをぶつけたり抵抗の構えを見せたりするという、両価的(アンビバレント)な行動を示す。	一貫性が低い(「気まぐれ」な関わり方)。 安全基地の役割を適切に果たしている時と、そうでない時の差がある。	養育者の所在やその動きにいつも過剰なまでに用心深くなり、できる限り自分の方から最大限に「くっつきたい」というシグナルを送出することで養育者の関心を絶えず自分の方に引きつけておこうとする。
未組織化型	D無秩序・無方向型	接近と回避という本来ならば両立しない行動をとったり、うつろな表情で固まったりする。総じて、どこへ行きたいのか、何をしたいのかが読み取りづらい。時折、養育者の存在におびえるような態度を見せることがあり、むしろ初対面の者に対し、より親しげな態度で振舞うこともある。	①虐待や極端なネグレクトを行う養育者、②抑うつ傾向が高い等の感情障害があったり、精神的に極度に不安定な養育者、③ストレスに対し極めて脆弱で無力感に浸りやすく、情緒的に引きこもりやすい養育者が想定されている。	本来は「安全基地」であるはずの養育者自身が、子どもにも危機や恐怖を与える張本人でもあるという極めて逆説的な状況のため、子どもは、不安や恐れを感じたとしても、養育者に近づくこともできず、また養育者から遠退くこともできず、本来両立しない近接と回避という行動を同時にとったり、うつろにその場をやり過ぎたり、また凍り固まった状態に陥るしかない。

*遠藤(2007)を参考に作成。

との認識が広がりつつある(遠藤, 2007)。特に、最近、被虐待児など、極端に劣悪な環境で育ったり、著しいトラウマ体験をした子どもには、「アタッチメント障害」(対象を選ばない無差別的な社交性と特徴とする非抑制系と、極端な情緒的引きこもりを特徴とする抑制系の2つのタイプがある)が多いことが注目されている(遠藤, 2007; 2009 a)。

なお、表1は、SSPによるアタッチメントスタイルのタイプ分けと、を整理したものである。

(2) 乳幼児期のアタッチメントと児童期の仲間関係

遠藤(2002)の概説によると、乳幼児期に安定型のアタッチメント・

スタイルであった子どもは、児童期において、仲間に対して積極的に、しかもポジティブな情動をもって働きかけることが多く、また共感的な行動を多く示すため、仲間からの人気が高まる確率が高くなるという。それに対し、乳幼児期に回避型であった子どもは、児童期において、ネガティブな情動をもって攻撃的に振る舞うことが多いため、仲間から拒否され孤立する傾向が強くなるという。また、アンビバレント型であった子どもは、他児の注意を過度に引こうとしたり、衝動やフラストレーションに陥りやすかったりする一方で、時に従属的な態度をとり、仲間から無視されたり攻撃されたりする確率が相対的に高くなるとされる。これは、乳幼児期における養育者とのアタッチメント関係によって内在化される内的作業モデルが、児童期の仲間関係にある程度規定することを示唆するものと見ることができるであろう。

(3) 青年期以降におけるアタッチメントの展開

ボウルビーが、子どもと養育者のアタッチメント関係が子どもの認知機構の中にイメージ（内的作業モデル）として内在化され、子どもの成長後の対人関係に影響を与えるという仮説を立てたことについては前述したとおりである。その後、アタッチメント研究の中心課題がアタッチメントの個人差の実証研究へと展開していく中で、乳幼児期（児童期）のアタッチメント・スタイルが実際にどの程度の連続性を有するものであるのか、また、乳幼児期のアタッチメント・スタイルが成長後の対人関係をどの程度予測するものであるのかを解明することに関心が持たれるようになった。ここでは、成人（以下、青年期以降という意味で用いる）のアタッチメントスタイルの測定方法について述べた上で、乳幼児期のアタッチメントスタイルが成長後の対人関係を現にどの程度予測（規定）するのかという問題を取り上げておく。

①AAIによる成人のアタッチメントスタイルの測定とタイプ分け

成人のアタッチメントの個人差（アタッチメント・スタイル）の測定は、アダルト・アタッチメント・インタビュー（Adult Attachment Interview: AAI）という面接手法を用いて行うのが一般的となっている。

数井（2005 a）や遠藤（2007）の概説によると、AAIは、乳幼児期・

児童期における両親（やそれに代わる主要な養育者）との関係について、いくつかの質問（乳幼児期・児童期における養育者との関係の概略、その関係を最もよく表す5つの言葉、それらに関する具体的エピソード、ケガや病気をした際の養育者の対応、養育者との別離、養育者の喪失、養育者から受けた虐待などの経験、青年期・成人期における両親との関係の変化など）を行うことで、被面接者のアタッチメント・システムを無意識的に活性化させ、被質問者の認知機構の中にイメージとして内在化された「安全基地」としての養育者への近接（アクセス）のあり方を測定するものである。

このAAIの最も大きな特徴は、被面接者の「語りの内容」（養育者との経験の中身）以上に、「語り方」や「語りの構造」（首尾一貫した矛盾のない説明がなされているかどうか）に重点を置いてアタッチメント・スタイルを測定・分類するという点である。すなわち、例えば被面接者が「親は優しい」、「親は私にとって信頼できる存在である」という内容を語った場合であっても、そのことのみをもって被面接者のアタッチメント・スタイルが安定しているとは判断しない。むしろ、養育者との関係性について、ポジティブな事柄だけでなくネガティブな事柄も含めて、どれだけリアルで信憑性の高いエピソードの記憶の陳述が伴っているのか、また、矛盾なく首尾一貫して、かつ不安や防衛なしに養育者との関係性について語りうるのかという観点が最も重視される測定のポイントとなる。

AAIでは、上のような手続により、成人のアタッチメント・スタイルを、安定自律型、アタッチメント軽視型、とらわれ型、未解決型の4つのタイプに分類整理することになる（それぞれの特徴については、表2を参照）。

②生涯にわたるアタッチメントスタイルの連続性と変化

乳幼児期（児童期）のアタッチメントスタイルと青年期以降のアタッチメント・スタイルがどの程度の持続性・連続性を有するかは、基本的には、同一個人における乳幼児期のSSPの結果と、青年期・成人期のAAIの結果とを対比し、理論的な対応関係どおりの一致が見られるかどうかを問うという形で検討される（遠藤，2007）。

表2 AAI による分類と SSP による分類との対応関係

タイプ	AAI における語りの特徴	SSP との対応関係／対人関係の特徴
安定自律型 過去のアタッチメント関係が自分の人生や現在のパーソナリティに対して持つ意味を深く理解しているタイプ。	自分のそれまでのアタッチメント関係の歴史を、肯定・否定の両面を併せて整合・一貫した形で語るができる。	理論的には、SSP の安定型に対応。乳幼児期において、養育者との間に安定したアタッチメント関係を形成したため、「自分は他者から受け容れられる存在である」、「他者は頼れる存在である」という内容のイメージ（内的作業モデル）を内在化している。そのため、他者および自分を深く信頼しており、対人関係は全般的に安定している。
アタッチメント軽視型 自分の人生におけるアタッチメント関係の重要性や影響力を低く評価するタイプ。	表面的には、自分の親のことを理想化し、肯定的に評価したりもするが、親との具体的な相互作用やエピソードについてはほとんど語ることがない。	理論的には、SSP の回避型に対応。乳幼児期に、「自分は養育者（他者）から拒絶される存在である」、「自分が近づこうとすればするほど養育者（他者）は離れていく」という内容のイメージ（内的作業モデル）を内在化。そのため、潜在的に、養育者あるいは他者一般との親密な関係を避けようとする傾向がある。
とらわれ型 過去の養育者との不安定なアタッチメント関係に、いまだに深くとらわれているタイプ。	自分のアタッチメント関係の歴史を首尾一貫した形で語るができない（語る内容に矛盾が認められる）。自分の過去、特に養育者が自分に対してとった態度等に深くとらわれ、いまだ強いこだわりを持っており、自分の養育者について語る際、時に激しい怒りを示すことがある。	理論的には、SSP のアンビバレント型に対応。乳幼児期に、「自分はいつ見捨てられるかわからない」、「養育者（他者）はいつ自分の前からいなくなるかわからない」といった内容のイメージ（内的作業モデル）を内在化。その結果、養育者（他者）の所在やその動きにいつも過剰なまでに用心深くなる。よって、他者との親密な関係を強く切望する一方で、自分が嫌われるのではないかと、見捨てられるのではないかと不安を抱いており、対人関係は全般的に不安定になりがちである。
未解決型 過去にアタッチメント対象の喪失や被虐待などのトラウマ体験を有し、それに対していまだに葛藤した感情を抱いている（心理的に解決できていない）、あるいは、「喪」の過程から完全に抜け出していないタイプ。	時に、会話の中に、非現実的な話が入り混じる。例えば、死んでしまった人が、まだ生きているかのような内容の話をするなど。	理論的には、SSP の無秩序・無方向型に対応。本来は「安全基地」であるはずの養育者自身が危機や恐怖を与える張本人でもあるという極めて逆説的な状況（「避難すべき唯一の場所が恐怖の源でもある」という状況）を、いまだ心理的に解決できないまま引きずっている。なお、このタイプの親子は、加齢につれて、子どもと養育者の「役割逆転」現象が見られるようになるとの指摘がある。これは、親を氣遣うことで、親の不可解で予測できない突然の乱れを、少しでも食い止めようとする試みなのではないかと解釈されている。

*遠藤（2007）：数井（2005 b）をもとに作成。

この問題については、これまで相当数の研究が行われてきているが、そうした研究は総じて、SSP によって測定される乳幼児期のアタッチメントスタイルと、AAI によって測定される青年・成人期のアタッチメントスタイルとの間に「緩やかな連続性」（Fralely, 2002）を認める傾向にあり、乳幼児期のアタッチメント・スタイルがその後の各発達段階におけるアタッチメント・スタイル、そして対人行動の質やパーソナリティ特性を

「ある程度、予測するという結果」(遠藤, 2007)を示しているとされる。

ただし、SSPのタイプとAAIのタイプとの間に比較的高い確率で理論どおりの一致が認められたことを報告する研究(例えば, Waters et al., 2000)においても、その一致の確率は60~70%程度であり、この点からすると、乳幼児期における養育者とのアタッチメント関係によって子どもの中に内在化される内的作業モデルが、永続・不変のものとして生涯にわたって存続し、対人関係に影響を与えつづけるとまでは言えないということになる。近年の研究では、乳幼児期に不安定型の内的作業モデル(SSPの回避型もしくはアンビバレント型)が内在化された場合であっても、その後、青年期や成人期にかけて、「自らに変化を与えうる、異質な対人関係」(遠藤, 2007)、つまり、長期的に安定した緊密な関係(恋愛関係、夫婦関係、友人関係)を経験することによって、安定型の内的作業モデルを事後的に獲得しうること(「獲得安定型」)が報告されている(例えば, Crowell et al, 2002)。

もっとも、乳幼児期のアタッチメント関係の結果として不安定型の内的作業モデルが内在化されると、その内的作業モデルが対人関係の構築の場面で無意識的に作用するため、「自らに変化を与えうる、異質な対人関係」つまり長期的に安定した緊密な関係(恋愛関係、夫婦関係、友人関係)を経験できる確率自体が低くなり、その結果として、アタッチメントスタイルや対人関係、パーソナリティも、その連続性をますます増大させていくとの指摘もある(遠藤, 2007)。このように考えるならば、乳幼児期におけるアタッチメント関係が青年期以降の対人関係に与える影響は、やはり、無視できない重要性を持つものと言えよう。

③質問紙による「自己モデル」と「他者モデル」の測定

上記のAAIによる測定とタイプ分けは、基本的には、青年期・成人期における養育者とのアタッチメント関係(養育経験によって内在化された、「安全基地」としての養育者のイメージ[内的作業モデル]、そしてそのイメージへのアクセスのしかた)を測定するものと言える。

これに対し、養育者とのアタッチメント関係ではなく、一般的な対人態度(対人関係に関するパーソナリティ)を質問紙法によって測定すること

を通して、アタッチメント・スタイル（他者との円滑な関係の構築につき、自分への自身と、他者への信頼を、どの程度有しているのか）を測定するという方法を用いた研究も、近年、増加している。青年期以降においては、養育者に加えて（あるいはそれに代わって）配偶者や恋人、友人などが、アタッチメント対象（＝「安全基地」＝危機的状況で頼りたいと思える信頼できる人物）になりうるが、この質問紙法による測定では、そうした養育者以外のアタッチメント対象との関係性を経験することによって生じるアタッチメント・スタイルの変化をも考慮した形で、その時々のアタッチメント・スタイルを測定することが可能となる。具体的な質問項目については、紙幅の制約上、ここに示すことはできないが（詳しくは、Hazan & Shaver, 1987；詫摩・戸田, 1988；Bartholomew & Horowitz, 1991を参照）、大まかに言えば、①自分は、他者と親しくしたり、他者に頼ることを好んでいるか否か、②他者は、自分と親しくしたり、自分に頼ることを望んでいるか否か、この2点を問うことになる。①は、自分は他者との間に緊密な関係を構築できるかについてのイメージ（自己に関する内的作業モデル＝「自己モデル」）、②は、他者一般は自分との緊密な関係構築を望んでいるか（良好な関係構築につき他者をどれだけ信頼できるか）についてのイメージ（他者に関する内的作業モデル＝「他

表3 自己モデル・他者モデルによる成人のアタッチメント・スタイルの4分類

内的作業モデル		自己モデル 自己に対するイメージ＝「自分は価値ある存在か否か」＝自分への自信	
		肯定的	否定的
他者モデル 他者に対するイメージ ＝「他者は信頼に値し、助けてくれる存在か否か」＝他者への信頼	肯定的	安定型 自分に自信を持つとともに、他者を信頼しているため、他者との親密な関係が快適であり、また、自律的である（他者への依存度が低い）ため、安定した対人関係を構築できる。	とらわれ型 一般的には他者を信頼しているため、他者を回避することはないが、自分に自信がなく不安であり、他者に依存的になる（他者の感情や行動に過度に敏感になり、その影響を受けやすくなる）傾向がある。
	否定的	拒絶回避型 自分に自信はあるが、他者は信頼していないため、他者に対して回避的・拒絶的に振る舞う。他者に依存的になることをよしとせず、いわゆる「孤高」をよしとする傾向あり。	対人恐怖的回避型 自分に自信がなく不安であり、他者の感情や行動に過度に敏感でその影響を受けやすい一方、他者を信頼できないため、他者に拒絶されることを怖がり、他者との緊密な関係を回避する傾向あり（社会的関係からの撤退）。

*安藤・遠藤（2005）をもとに作成。

者モデル])をそれぞれ測定するものであり、①と②の二次元(肯定/否定)の組み合わせにより、4タイプに分類されることになる(表3を参照)。この質問紙法による4分類の最も大きな特徴は、従来、回避型(AAI)ではアタッチメント軽視型)として一括りにされ、同等に扱われていたものを、「拒絶回避型」と「対人恐怖的回避型」の2つの異なるタイプに峻別した点にあると言われている(安藤・遠藤, 2005)。

4. アタッチメントの世代間伝達

アタッチメントスタイルは、親から子へと世代を越えて引き継がれる可能性が高いと言われる(アタッチメントの世代間伝達)。具体的には、一定の時点における養育者のAAIのタイプと子どものSSPのタイプは、60%~70%程度の確率で一致することが、多くの研究によって報告されている(例えば、van IJzendoorn, 1995; 数井他, 2000)。その機序に関しては、①親のアタッチメント・スタイルが、子どものアタッチメント・スタイルの規定要因である養育行動の質(敏感性等)に反映されるからであるとする説明のほか、②遺伝的要因や、③親子を取り巻く種々の社会的文脈の影響を指摘する説明などがある(数井, 2005 b)。

5. アタッチメントの広がり

子どものアタッチメントは、第一次的には、子どもと特定の養育者(通常は母親)の間で形成されるが、子どもは、その他の家族(父親や祖父母等)、保育者、教師、施設職員等、「安全基地」としての役割を担う他者との間にもアタッチメントを形成しうるものと考えられている。近年では、複数のアタッチメント対象(「安全基地」)を持つことが子どもの発達にとってプラスに作用することが報告されており、アタッチメントのネットワークを構築することの重要性が説かれている(例えば、数井, 2005 a)。

他方、青年期以降においては、上述のように、夫婦関係、恋愛関係、友人関係など、長期的に安定した緊密な関係の中にアタッチメント対象(「安全基地」)を見出すものとされているが、そうした関係のほか、カウンセラー(セラピスト)とクライアントの関係、保育者・教師と保護者の

関係等においても、アタッチメント関係は成立しうるものと考えられている。

Ⅱ. アタッチメント理論からアプローチする心理臨床

では、心理臨床にアタッチメントという視点を導入することによどのような利点・問題点があるのか、また、アタッチメント理論からどのような事例検討および支援の指針を引き出せるのか。以下、簡単にまとめておく。

1. アタッチメントの視点を取り入れることのメリット

心理臨床にアタッチメントという視点を導入するメリットは、クライアント個人のトラウマを中心とする内的な精神世界だけでなく、クライアントを取り巻く環境（「安全基地」たるアタッチメント対象との関係性）をも視野に入れた形で、重層的・複眼的な視点からの事例検討および支援が可能になるという点であろう。「安全基地」が適切に機能していればトラウマがもたらす影響は軽減・解消されるわけであり、また、「安全基地」によって保護される機会を奪われた場合には社会性（パーソナリティ）の発達に悪影響が生じ、その影響が生涯にわたって存続する可能性が高いというわけであるから、真に深刻な問題は、一時点のトラウマ体験そのものよりも、むしろ、その後に「安全基地」による適切な保護を受けることができなかったことにあるとも言える。この意味で、「アタッチメント」という視点-「安全基地」は適切に機能してきたのか、また、しているのか-を導入することの効用は大きいものと考えられる。

2. アタッチメントの視点を取り入れる際の留意点

アタッチメントの視点を心理臨床に取り入れることには、上のようなメリットがあるものの、アタッチメントに対する誤解や過大評価の危険という陥穽も存在する。アタッチメント理論は複雑・難解であり、その全体像を的確に理解することが容易ではない。また、アタッチメント理論は、子どもの発達、そして、人の生涯にわたるパーソナリティ（対人関係スタイ

ル)の展開を説明するという壮大な理論であるだけに、ともすれば、アタッチメントによって、人の発達やパーソナリティ、対人関係のすべてを説明できるという誤解を受けがちであるが、アタッチメント理論にも、当然、理論としての限界があるわけであり、「アタッチメントで、何を、どこまで説明できるのか」を的確に理解しておく必要がある。

この点に関して重要であると思われるのは、①人の発達を規定する要因として、遺伝(気質)と環境(養育環境)、そして出産前後のトラブル等があげられるが、アタッチメントは、そのうちの環境要因に分類されるのであり、アタッチメント理論は、直接的には、養育環境が人の発達に与える影響を説明するものにすぎないこと、②アタッチメントという概念は、一時的に生じたネガティブな状況を、「安全基地」による保護を受けることで、元にあった平常の状況を回復するというものであり、愛情による絆とは次元を異にしていること、③子どものアタッチメントと成人のアタッチメントは根本的に質を異にしており(子どもの場合は物理的安全基地たる養育者への近接、成人の場合は内的作業モデルによる対人情報処理〔他人の行動の予測・解釈〕)、アタッチメント以外の対人行動の要素(親和・提携、性、世話等)の比重が高まる成人の場合には特に、アタッチメントの影響を過大視してはならないこと(遠藤他, 2008)である。

3. アタッチメントの視点を取り入れた事例検討および支援のあり方

(1) 事例検討ー「安全基地」のアセスメント

アタッチメントの視点からアプローチする心理臨床においては、まず、クライアントに「安全基地」(困難な状況で頼り保護を求めるアタッチメント対象)がいるか、また、「安全基地」が適切な役割を果たしているのか、有効に機能しているのかをアセスメントすることが出発点となる。

「安全基地」のアセスメントは、アタッチメント理論に厳密に依拠するならば、クライアントが乳幼児期(児童期)の場合には SSP、青年期以降の場合には AAI または質問紙によって行われるべきことになる。もっとも、SSP や AAI には高度な専門的スキルが要求されることから、まずは、過去および現在の親子関係・家族関係・恋愛関係・友人関係等を関係

者にインタビューし、アタッチメントをめぐる状況を大まかに把握するという、より簡易な方法で代替することも考えられてよいであろう。

上のような方法による「安全基地」のアセスメントの結果、クライアントの心理的問題が、「安全基地」がないこと、あるいは「安全基地」の機能のしかたに問題があることに関連して生じていることが判明した場合には、アタッチメントの視点からアプローチした形での支援が必要となる。

(2) 支援—「安全基地」の形成・活用支援

アタッチメントの視点からアプローチした形での臨床的支援は、「安全基地」の形成と活用によるクライアントの社会的適応を支援していくという方向で進められることになる。

この「安全基地」の形成・活用支援の具体的手法として、①カウンセラー（セラピスト）が、クライアントにとっての「安全基地」となりうる人物を見定め、その者とクライアントとの安定的なアタッチメント関係の形成を側面から支援していくというアプローチと、②カウンセラー自身が「安全基地」としての役割を担うアプローチの2通りが考えられるが、どちらのアプローチを採用するかは、クライアントの発達段階や事例の特殊性などを考慮しつつ、ケース・バイ・ケースで判断するほかないものと思われる。

例えば、(i) 青年期以降のクライアントの社会的適応が問題となっているケースにおいては、そもそも、困難な状況で保護を求めて頼っていくべき「安全基地」を欠いていること自体に問題の核心があることも多いと考えられるため、基本的には、カウンセラー自身が「安全基地」としての役割を担うという②のアプローチが有効であろう。

他方、(ii) アタッチメント・スタイルの不安定さに起因する子どもの発達遅滞や不登校等のケースにおいては、基本的には、養育者との安定したアタッチメント関係の形成に向けて、①の側面支援のアプローチをとることとなる。ただし、上述した「アタッチメントの世代間伝達」に関する研究知見によると、子どものアタッチメント・スタイルの不安定さは、養育者のアタッチメント・スタイルの不安定さに起因して生じる可能性が

高いため、子ども・養育者間での安定したアタッチメント関係の形成を支援していくにあたっては、養育者のアタッチメント・スタイル（内的作業モデル）を安定型（安定自律型）に改善することが不可欠となる（中尾・工藤，2007）。そのためには、結局、上の（i）のケースと同様に、カウンセラーが養育者にとっての「安全基地」としての役割を担うことを通して養育者のアタッチメント・スタイル（内的作業モデル）を改善していく必要が生じる。つまり、子どもの発達遅滞や不登校といったケースにおいては、まず、カウンセラー自身が養育者の「安全基地」としての役割を担うことで養育者のアタッチメント・スタイル（内的作業モデル）を安定自律型に改善し、それを通して、子ども・養育者間の安定したアタッチメント関係の形成を支援していくという手法を用いる必要がある。

以上のように、「安全基地」の形成と活用の支援においては、結局、カウンセラー自身が「安全基地」としての役割を担い、クライアントのアタッチメント・スタイル（内的作業モデル）の改善—つまり、他者を信頼して困難な状況を解決するという行動傾向の定着—を図っていくことが重要となるわけであるが、そのために、カウンセラーは、クライアントに対してどのように関わっていけばよいのかが問題となる。特に、臨床的支援が必要なネガティブなアタッチメント・スタイルのクライアントは、他者との間で緊密な関係を構築・維持していくことに関する自信や他者への信頼が不十分であり、困難な状況で他者を頼って問題を解決するという行動傾向がなく、カウンセリングの場それ自体から撤退する傾向が強いと言われている。そのため、カウンセラーには、クライアントをカウンセリングの場につなぎとめ、カウンセラーに頼ることで困難な状況を解決できるとの信頼を醸成するための工夫が求められるのである（林，2007；北川，2007）。

この点に関連して、申崎ら（2008）は、クライアントがカウンセラー（セラピスト）を「安全基地」として利用する経験を積み重ねることで、そのアタッチメント・スタイル（内的作業モデル）を改善していくプロセスを4段階に整理し、それぞれの段階でカウンセラー（セラピスト）がどのようにクライアントに関わっていけばよいかを論じている。それによ

ると、自己モデル・他者モデルともにネガティブな第1段階では「ホールディング（受容）」、カウンセラーへの信頼から他者モデルがポジティブに転じてくる第2段階では「自我の代理（適切な判断）」、自己モデルもポジティブに転じてくる第3段階では「情緒交流」、「安全基地」としてのカウンセラーのイメージ化が完了する第4段階では「水路づけ（軌道修正）」が、カウンセラーの役割となるという。このように、具体的な関わり方を段階に分けて整理する研究は現時点では希少であり、参考になる。

（3）特別の考慮を要する事例—子ども虐待と発達障害について

最後に、アタッチメントの視点を取り入れる際に特別の考慮を要する事例として、子ども虐待と発達障害（自閉症スペクトラム）を取り上げ、事例検討および支援にあたっての留意点を簡単にメモしておきたい。

①子ども虐待

SSPで無秩序・無方向型に分類された被虐待児は、上述のアタッチメント障害など、様々な認知・行動上の問題や精神病理との関係で大きなリスクを抱えているため、養育者との分離が必要となることも多い。正常な発達に向けての最重要課題は、養育者以外の「安全基地」を見出すことであり、その候補として、心理・福祉専門職や施設職員、里親、教師等の関係者が想定される。これらの者が「安全基地」としての役割を自覚し、アタッチメントのネットワークを意識的に構築することが必要となろう。

②発達障害（自閉症スペクトラム）

従来、自閉症スペクトラム児（「AS児」）が養育者との間にアタッチメント関係を形成することは困難であると考えられてきたが、SSPを用いた最近の研究によると、AS児も養育者との間に安定したアタッチメント関係を形成しうることが報告されている（Rutgers et al., 2004）。

もっとも、AS児のアタッチメントには、定型発達児の場合とは異なる特徴があることも指摘されている。まず第1に、AS児の場合、SSPで安定型に分類される比率は、定型発達児の場合と比べて低いことが報告されており（Rutgers et al., 2004）、これは、自閉症スペクトラムに特有の症状の程度（社会性のレベルの低さ、特に、人という社会的刺激に対する忌

避傾向)と、それに由来する養育者の敏感性の低下に起因しているという見解が最近有力となっている (Naber et al., 2007; van IJzendoorn et al., 2007; 遠藤, 2009 a)。また、第2に、AS 児の場合、養育者を、自分の要求を実現するための「道具的安全基地」としてのみ利用する傾向が強く、この点は、養育者との双方向的な情動のやりとりを通して養育者を「心理的安全基地」 (=心の拠り所) として利用する定型発達児のアタッチメントとは異なると言われている (別府, 2007)。そして、第3に、AS 児の場合、養育者を「道具的安全基地」として利用する体験を積み重ねることで内在化される養育者のイメージ (内的作業モデル) を、養育者以外の者との関係に一般化して適用しない傾向が強く、この点で、養育者を「心理的安全基地」として利用する体験を積み重ねることで内在化される養育者のイメージ (内的作業モデル) を、養育者以外の者との関係でも一般化して適用するようになる定型発達児のアタッチメントとは異なっているとされる (遠藤, 2009 a)。そして、そのことから、AS 児が広く社会生活全般にわたって適応的に振る舞えるようになるためには、種々の生活場面において一対一対応の「道具的安全基地」としての役割を担う者をできるだけ多く持つことが重要であると考えられるようになっている (別府, 2007; 遠藤, 2009 a)。

まとめに代えて

本稿では、アタッチメント理論に関する研究知見を概観した上で、アタッチメント理論からアプローチする心理臨床のあり方を考察したが、心理学領域において最近注目されつつある、アタッチメントの視点を取り入れた保育や子育て支援については、紙幅の制約もあり、取り上げることができなかった。そうした問題についての考察は、別の機会に行うこととした。

文 献

Ainsworth, M. D. S. et al. (1978) Patterns of attachment : A psychological

- study of the strange situation. Hillsdale : NJ Lawrence Erlbaum Associates.
- 安藤智子・遠藤利彦（2005）青年期・成人期のアタッチメント，数井みゆき・遠藤利彦（編），アタッチメント：生涯にわたる絆，ミネルヴァ書房
- 別府哲（2007）障害を持つ子どもにおけるアタッチメント，数井みゆき・遠藤利彦（編）アタッチメントと臨床領域，ミネルヴァ書房
- Bowlby, J. (1969/1982) Attachment and Loss Vol. 1: attachment. New York : Basic Books. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一訳（1991）『母子関係の理論Ⅰ－愛着行動－（新版）』岩崎学術出版社
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991) Attachment styles among young adults : A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226–244.
- Crowell, J. A. et al (2002) Assessing secure base behavior in adulthood : Development of measure, links to adult attachment representations and relations to couples' communication and reports of relationships. *Developmental Psychology*, 38, 679–693.
- 遠藤利彦（2002）情動と体験の内在化，須田治・別府哲（編）社会・情動発達とその支援，ミネルヴァ書房
- 遠藤利彦（2005）アタッチメント理論の基本的枠組み，数井みゆき・遠藤利彦（編）アタッチメント：生涯にわたる絆，ミネルヴァ書房
- 遠藤利彦（2007）アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する，数井みゆき・遠藤利彦（編）アタッチメントと臨床領域，ミネルヴァ書房
- 遠藤利彦（2009 a）アスペルガー症候群におけるアタッチメント，榊原洋一（編）アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助（別冊発達30），ミネルヴァ書房
- 遠藤利彦（2009 b）情動は人間関係の発達にどうかかわるのか，須田治（編）情動的な人間関係への対応，金子書房
- Fraley, R. C. (2002) Attachment stability from infancy to adulthood : Meta-analysis and dynamic modeling of developmental mechanisms. *Personality and Social Psychology Review*, 6, 123–151.
- 林もも子（2007）不登校の長期化と母親のアタッチメント，数井みゆき・遠藤利彦（編）アタッチメントと臨床領域，ミネルヴァ書房
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹（2000）日本人母子における愛着の世代間伝達，*教育心理学研究*, 48, 323–332.
- 数井みゆき（2005 a）母子関係を越えた親子・家族関係研究，遠藤利彦（編）発達心理学の新しいかたち，誠信書房
- 数井みゆき（2005 b）親世代におけるアタッチメント，数井みゆき・遠藤利彦

- 彦 (編) アタッチメント：生涯にわたる絆, ミネルヴァ書房
- 数井みゆき (2007) 子ども虐待とアタッチメント, 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメントと臨床領域, ミネルヴァ書房
- 北川恵 (2005), アタッチメントと病理・障害, 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント：生涯にわたる絆, ミネルヴァ書房
- 北川恵 (2007) 精神病理とアタッチメントとの関連, 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメントと臨床領域, ミネルヴァ書房
- 串崎真志・永井知子・酒井隆 (2008) アタッチメントから見た事例の理解, 関西大学文学部心理学論集, 2, 1-5.
- Naber, F. B. A. et al. (2007) Attachment in toddlers with autism and other developmental disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 37, 1123-1138.
- 中尾達馬・工藤晋平 (2007) アタッチメント理論を応用した治療・介入, 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメントと臨床領域, ミネルヴァ書房
- Rholes, W. S. & Simpson, J. A. eds. (2004) *Adult attachment*, The Guilford Press. 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志監訳 (2008) 成人のアタッチメント, 北大路書房
- Rutgers, A. H. et al. (2004) Autism and attachment: A meta-analytic review. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 45, 1123-1134.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988) 愛着理論から見た青年の対人態度：成人愛着スタイル尺度作成の試み, 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- van IJzendoorn, M. H. et al. (2007) Parental sensitivity and attachment in children with autism spectrum disorder: Comparison with children with Mental retardation, with language delays, and with typical development. *Child Development*, 78, 597-608.
- Waters, E. et al. (2000) Attachment security in infancy and adulthood: A twenty-year longitudinal study. *Child Development*, 71, 684-689.